

特集

# 感謝。

町が誇る日本の里100選に選ばれた三富新田。細長い短冊型の地割が続く美しい景観を今も残すこの三富新田が出来るまでには、開拓農民の血がにじむような努力と苦勞がありました……。

## 水辺の開拓から 台地の開拓へ

江戸時代に先行する戦国時代から、大規模な治水土木工事による新田開発が進められ、土の肥えた大河川流域に水田（稲作新田）地帯が形成されていきました。新田開発の進行は、同時に多くの新田村落を生みだし、戦国時代〜江戸時代を通じて、全国で数千から1万前後の村が成立しました。

農業社会であった当時、幕府や藩などの領主たちは、新田開発を行って耕地を広げ、そこに農民を配置していきましました。つまり、新たな耕地からの収穫物により、年貢の増収をはかろうとしたわけです。その後、水田の開発が限界になると、水に恵まれず土のやせた台地部分にも開発の手が伸ばされ、



## 柳沢吉保の肖像

5代将軍徳川綱吉に仕え、のちに川越藩主となり、三富新田の開発に着手しました。(山梨県韮崎市常光寺蔵・写真は埼玉県立歴史と民族の博物館の複製)

畑（耕作新田）地帯が作られていきました。

## 開拓以前の武蔵野

「昔の武蔵野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といつても宜い。」と、国木田独歩がそ

の代表作『武蔵野』（明治31年1月作）のなかでつづっているように、現在では雑木林が武蔵野のシンボルとなっています。しかし、冒頭の独歩の表現どおり、北を入間川・荒川、南を多摩川にはさまれた武蔵野地域はかつて広大な原野が果てしなく広がり、周辺農村の

入会地として利用されてきました。農民たちは、その利用料として幕府や領主川越藩に金銭を納めていました。当時の武蔵野は、農民が生活を維持していくために必要な屋根葺の萱、馬の飼料、刈敷・堆肥などの肥料、燃料の供給源として、なくてはならないものであったのです。

しかし、この武蔵野にも新田開発の手が入り、新しい村が成立してくと、次第に狭められていく入会地の利用をめぐる、自らの権利を守ろうと

## 柳沢吉保が三富新田 開拓に着手

する農民同士あるいは村同士で対立が起こりました。北武蔵野にあたる三芳近辺もその例外ではなく、慶安二年（1649）以降数度の争いが発生し、幕府に裁許を願ひ出ることもありまし

た。(左上写真参照)  
元禄七年（1694）七月、長年争いを繰り返してきた北武蔵野のこの土地は幕府評定所の判断で、川越藩の領地であることが認められ、これにより川越藩主柳沢吉保は、新田開発を推進していくことになりました。

吉保の命をうけた曾根権太夫をはじめとする家臣たちは、まず開発に従事する農民を集めました。開発がはじまってから約2年後の元禄九年（1696）五月に検地が行われ、上富91屋敷・中富40屋敷・下富49屋敷、合計180屋敷の新しい村ができあがりました。三富新田の誕生です。「富」のついた村の名前は、中国の孔子の教えに基づくもので、豊かな村になるようにという願いが込められています。

## 三富新田産みの親 柳沢吉保とは

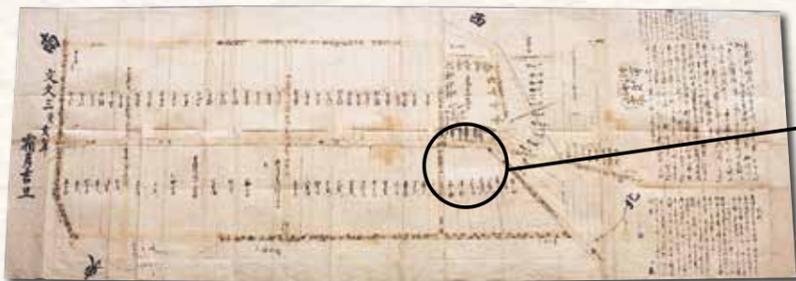
吉保は万治元年（1658）江戸市ヶ

谷で生まれ、父安忠の俸禄530石を継承し館林藩主徳川綱吉に仕えました。幼い頃から学問を好み、武芸の修行に励んだといわれています。元禄元年（1688）には、1万石の加増を受けて5代将軍綱吉の側用人となり、將軍側近として幕府政治を掌ることとなります。さらに元禄七年には武蔵国川越藩主を命じられ7万2千3百石の大名となります。

吉保は川越藩主として民政に意を注ぎ着任後わずか半年で三富新田の開発に乗りだすなどの大きな業績を残しています。宝永元年（1704）には甲府藩15万石の藩主（実高22万石）に取り立てられ、父祖の故郷に錦を飾るとともに川越藩主時代を上回る業績を残します。しかし、宝永六年綱吉の死去により吉保も隠退し、長子吉里に家督を譲り5年後の正徳四年（1714）駒込六義園で57歳の生涯を終えます。吉保の遺骸は甲州永慶寺に葬られ、その後享保九年（1724）に柳沢家が大和郡山に国替えの折、恵林寺の信玄靈城の隣に改葬されました。「生類憐みの令」や「忠臣蔵」など徳川幕府の悪政にかかわったとの世評もある吉保ですが、三富新田開拓推進の偉業を成し遂げた大恩人としてその業績が今に語り伝えられています。

## 多福寺

元禄九年八月、柳沢吉保は開拓農民の心のよりどころとして、上富村に臨済宗三富山多福禪寺、中富村に祈願所として毘沙門社（別当寺多聞院）を建立しました。出身地の異なる者たちが寄り集まってくる新田村落での生活のため、寺社の建立によりなおさら村民としての一体的まとまり、連帯感情を作り出していくことが必要だったようです。三富新田に入村した農民たちは、この時まで上富村は亀久保村地蔵院、中富村・下富村は大塚村西福寺を菩提寺としていましたが、多福寺建立により、三村とも多福寺を菩提寺としました。以来、多福寺は三富農民の精神的支柱として大きな役割を果たしました。



## 上富村地割絵図

文久三年（1863）に写された開発当時の上富村の地割。地割所有者の名前が記されているほか、掘割や橋があったことがわかる。(多福寺蔵・町指定有形文化財)



↑新緑鮮やかな多福寺（5月撮影）。訪れる人たちに安らぎを与えてくれる。秋は紅葉を楽しむことができる。